

書 評

張錫厚校輯 『王梵志詩校輯』

北京 中華書局 一九八三年一〇月 三八二頁

ここ數年來、中國に於ける敦煌學の研究はなかなかの活況を呈しているように見受けられるが、こと文學の方面に限れば、他分野に比していささか立ち遅れの感があるのは否めない。敦煌俗文學の最も基本的な資料集成とも言うべき『敦煌變文集』（一九五七年、人民文學出版社）が中國國內では全くの稀覯本となつてしまい、要望に應えてようやく再版本が出版されるに至つたという一事は象徴的である。この書の出版以來、敦煌俗文學研究はこの書に全面的に依據して進められてきたといつてよいほどであるが、同時に研究の進展は、この資料集成が、とりわけ校定の面に於いて、極めて多くの不備と問題を有することを明らかにし、全面的な改訂の必要が提起されるに至つた（呂叔湘「新版

《敦煌變文字義通釋》讀后」『中國語文』一九八二年三期、など）ことを考え合せると、この二十數年間の遠回りを思い感無きを得ない。文學的語學的研究の中心となる資料の殆んどが、パリ・ロンドンに藏されていることに加え、中國國內では、そのマイクロ・フィルム、焼付寫眞の利用の條件が整備されていないことのハンディは想像以上に大きいと言えよう。その中で、最近に於ける唯一の例外とも言うべきものが、王梵志詩の研究で、多くの論文が各雜誌の誌面を賑わしてきた。その中心的存在は張錫厚氏で、「唐初白話詩人王梵志考略」（『中華文史論叢』一九八〇年第四期）、「敦煌寫本王梵志詩淺論」（『文學評論』一九八〇年第五期）、「關於敦煌寫本《王梵志詩》整理的若干問題」（『文史』第十五輯、一九八二年）等々、王梵志詩についての多くの論文を發表している。しかし、従來、王梵志詩を校録したものとしては劉復の『敦煌掇瑣』に收められた三種の王梵志詩集と、鄭振鐸の世界文庫本の『王梵志詩』があつただけで、前者はペリオ本三本の校録であるが異本による校合は全く行われていない、後者はやはりペリオ本三本の校録（一本のみ前者

と異なる(未見)、という不備な状況であった。さらに『大正藏經』卷八五・古逸部に収録されたものも挙げうるが、これもスタイン本一本のみの校録であった。そこに登場したのが、ここで取り上げる張錫厚氏の『王梵志詩校輯』である。本書は合計二十八本の敦煌寫本をもとに王梵志詩を校録し、さらに唐宋の詩話・筆記小説などに引用される王梵志の佚詩を集録したもので、巻頭の序で任半塘氏が言う如く、「このように系統的に敦煌遺書を整理して編纂された詩人の全集は、敦煌學研究の範圍内では、今迄餘りなかった」のであって、近來の敦煌學、とりわけ文學研究に於いては畫期的な出來事だと言ってよいであろう。

本書は二つの部分に分れる。前半は、「王梵志詩校輯」であり、後半は附編として、王梵志詩の著録の簡況、敦煌本王梵志詩の寫本の簡況、王梵志詩研究の要約集成、さらに氏自身の論文二篇の再録を載せる。外形から見る限り、誠に「全集」と稱するに足る。しかし結論的に言うところでは全くの見せかけであって、本書の内容に一步踏み込むと、

書評

そこには信じ難い程の誤りが山積している。本稿では、本書の中心である「王梵志校輯」のみを取りあげる。そのうち、卷六は諸書に引かれる逸詩の集成であるから、これにも觸れない。敦煌寫本の校録に限定する方が、本書の價值を判斷する上でより有効であると考えからである。なお張錫厚氏の用いた二十八種の寫本については全て東洋文庫所藏のマイクロフィルムを焼付けた寫真により對校しながら、さらに卷四については張氏の見えない寧樂美術館の寫真をも合せて見ながら、張氏の校録を檢討した。

まず「王梵志詩校輯」の分卷についてであるが、卷一から卷五までについては問題がない。しかし、卷六については、(294)(以下張氏の整理番號をこの形式で示す)が敦煌本『歷代法寶記』、(295)がP三〇二一に引かれているのを除けば、残りの三十四首は諸書に引用されたものであって、卷五までの詩とは資料性が全く異っていて同列に扱うことはできない。むしろ「輯佚」または「附録」として別扱いにすべきであろう。卷六として、卷五までと同列に扱うべきものは附載「梵志體」禪詩として扱われている十二首である。

本書の刊行後、張氏は「斯四二七七殘詩卷考釋」(『中華文史論叢』一九八四年第二輯)というこの寫本を扱った專論中で、この殘卷中の詩が王梵志の詩と似ていない理由を五條擧げて、要するに「禪詩」だと結論づけている。しかし、この寫本は首尾殘缺していて題を缺いており、「禪詩」は「斯擔因劫經錄」の擬題に過ぎないことに先ず留意しなくてはならない。さらに張氏が一斑しか、それも極めて誤った形で窺うことしかできなかったレニングラード本(蘇一四五六)には、まさにこの殘卷中の詩と共通する「禪詩」と呼ぶべき詩が多く含まれているのであり、しかもレニングラード本は卷末題記により「大曆六年五月□日」に「王梵志一百一十首」を抄したものであることが分るから、この附載の扱いは誤りと斷定できよう。また原寫本は二十三首を含むのに、十二首のみを選録したのも妥當ではない。最後に「補遺」の七首についてであるが、これは先に言及したレニングラード本(蘇一四五六)を校録したものであり、卷七とするのが適當であろう。張氏は極東民族研究所の目錄に附された寫本末尾の寫眞一葉から七首のみを、(それも

完全に誤讀して)校録しただけであるが、實は五十一首を得ることができるのである。(後述)。

次に卷一所收の作品について問題點を検討してみよう。

(2) 13句「人有七貧時、七富還相報」注七に「七貧、佛家謂人貧窮已極之時」と言うのは下の七富を無視した誤解である。七轉び八起きといった意味であることは疑いない。元曲の馬致遠『半夜雷轟薦福碑』第一折・混江龍「常言道七貧七富、我便似阮籍般依舊哭窮途」などを注に引くべきであろう。王梵志詩に見える佛教語彙に對する理解には、甚だ疑しい所がある。

(2) 15句「從財不顧人」注六に「從、原作徒、據大正藏本改」というのは誤り。徒は圖と同音であり、敦煌寫本通見の別字である。「徒(圖)」と校定すべきである。

(3) 6句「身死雇人埋」注四に「原作理、據甲二本改」。この注は不要。敦煌寫本は「土」に點を打つのが通例。この寫本の書きぐせを知らないと思え、(12) 11句「日理幾千般、光影急迅速」と誤り、文意通じないまま放置しているが、寫本は勿論「埋」に作り、唐代の書きぐせに従い點

が打ってあるにすぎない。(31) 1句「人生二代間」に「一代、原作一伐、據文義改」と注するのも同じ誤り。このよ
うな誤りは、他にも、(56) 11句「何爲抛宅走、良由不得
已」注七「已、原作心、據文義改」にも見られる。この詩
は韻字が氣・使・地……であるので已に改めたようだが、敦
煌寫本では心・止の二字の書法が近似していて、ここは止
と讀むべき所である。

(6) 他家笑吾貧 この詩を張氏は十二句一首とする。韻
の上からは問題がないが、卷一の底本である甲一本は詩と
詩の間に一字または二字の空き間があることに留意する必
要がある。この詩については、八句の「飽喫長展脚」の後
に二字分の空き間があるから、九句め以後の四句を別の一
首とすべきであろう。敦煌本王梵志詩は、甲二・甲三・甲四
の如く各詩を分ち書きしないものが殆んどである。甲一の
如く區別するものがあれば尊重すべきであろう。

(7) 大有愚癡君 この詩の分段は非常に大きな問題を孕
んでいる。寫本では(7)の後に(9)(10)が連続してお
り、一韻到底で合計44句の長編詩となっている。1句「大

いに愚癡の君有り、獨身にして兒子無し」から始まり、43
句「此れは是れ守財の奴、貧窮に死するを免がれず」まで、
守錢奴が死んで地獄に落ちる様を描き一編のまとまりをな
している。張氏はここに、原寫本の排列を全く無視し、し
かも何の注記もなしに(7)を12句で切り、その後(8)
を置いたのであるが、これは寫本では(15)の後に置かれ
ており、(14)(15)(8)と連続していて、42句一韻到底で
長編の一首をなしているものなのである。寫本にもとずい
て校定していく際に、このような無原則が有ってよいであ
ろうか。同じような原寫本に於ける排列の無視は、卷二の
(34)でも行われている。これは本來は(40)と(41)の間
に置かれていたのであるが、首句の「愚人癡淫淫」が(33)
と共通だからという理由で移し、何の注記もしていない。
王梵志詩には詩題が一切存在しないから、假に首句を取っ
て標目としたに過ぎないのである。首句の共通は、詩の内
容が共通ということにはつながらないから、排列を改める
理由は全く存しないと言ってよい。況んや(7)(9)(10)
で一首、(14)(15)(8)で一首を成している二首の長編詩

を根據なき排列換えによって分斷してしまつたのは、全くひどい校定と言わざるを得ない。

(7) 5句「司命門前喚、不容別隣里」注三「司命、原作伺命、據文義改」實は本書の最大の問題は、この「據文義改」にある。この校改が餘りにも頻出し、しかもその「文義」が明かでないことが多いのである。この場合は校定そのものは誤っていないのだが、この別字の表記法は「伺(司)命」とすれば十分なのであり、寫本の字の原形を残し、校定すべき字を示す方法としては、是非、この方法を取るべきであつた。この表示法によつて、頻度の高い別字・異文が浮び上つてくるのである。(103) 1句「向命取人鬼、屠兒殺羊客」は、この方法を取らなかつたために自らを誤ませた例であり、しかも注に「向命、俗稱索命」と言うのは全く論外である。向命などという俗語は勿論存在しない。この向が伺の読み誤りであることは自明である。 (勿論寫本は伺) 伺(司)命と屠兒を對にして始めて、この詩は「司命は人を取るの鬼、屠兒は羊を斃すの客。鬼は人の輿料を識り、客は羊の肉厄を辨ず。人は自ら死するを

覺えず、羊も亦た搦らるるを覺えず。恰も似たり園中の瓜の合に熟すれば即ち須らく摘まるるに」と人間もまた屠場の羊と同じだという詠嘆の詩として整つたものになるのである。同様に(110) 7句「百年有一倒、自去遣誰當」に「一倒、喻一死」と注する誤りも、(141) 8句「終歸有一到」を參看すれば、倒(到)の習見の別字として處理しうる。(9) 1句「沉淪三惡道、負時愚癡鬼」注二「時、原作持、據甲四本改」甲四本は「特」に作っている。「時」は張氏の読み誤り。このような寫本に對する單純な読み誤りは驚く程多いのであるが、ここの読み誤りはまた、敦煌資料に見える口語に對する知識の缺如をも示している。「李陵變文」に「豈謂將軍失利、將士徒然、負特壯心、乖違本願」(『敦煌變文集』八九頁九行)「丈夫失制輸狂虜、負特皇天孤傳(負)土」(九〇頁七行)と、「負特」は『變文集』中に二例見える。『遊仙窟』には「余更又贈詩一首、……祇可偕伴一生意、何須負持百年身」と一例のみ「負持」として見える。(注辟疆校録『唐人小說』二二頁三行) この『遊仙窟』の表記と甲一本は合致し、甲四本は「李陵變文」の

表記と一致している。いずれにせよ、「時」に改めるのは誤りである。このような口語に對する注意の缺如は、本書の誤りを多くする一因となっている。(38) 4句「街頭闊立地」には注もなく、附録の王梵志語辭索引もこの語を收めない。このことと、(56) 5句「貧窮實可憐、飢寒肚露地」注三「肚露地、民間俗語、形容衣不蔽體、露出肚皮來」という誤りは密接に關連していよう。「敦煌變文集」には、立地が二例、「漢將王陵變」に「二將勒在帳西角頭立地」(三八頁五行)、「舜子變」に、「舜子府(撫)琴忠(中)間、門前有一老人立地」(二九頁二行)とあり、さらに「後妻床上臥地不起」(舜子變、一三〇頁二行)の如く臥地が三例、「往往人前恰似癡、時時坐地由(猶)如醉(父母恩重經講經文、六八三頁四行)の如く坐地が一例あり、敦煌資料では、立地・臥地・坐地は接尾辭的な地をとまう口語語彙の一群を形成しているのであり、この詩の例により、さらに露地の一語を加えることができるのである。「貧窮にして實に憐む可し、飢寒にて肚は露地たり」と訓すべきであろう。「肚露地」で一語とすべきではない。

書評

(9) 11句「牛頭鐵叉杈、□□把刀搨。確擣磔磨身」注一二「□□、諸本殘缺」これは寫本の見方が不十分な例、「獄卒」の二字、甲四本では鮮明に見える。注一三「擣、原作擣、據大正藏本改」。敦煌寫本中で「才」と「木」とが殆んど書き分けの意識なく混用されていることは、少しでも寫本を扱えばすぐ分ることと、ことさらに校記に擧げるべきことではない、凡例に入れれば済むことである。

(10) 9句「角弓無主張、寶劍拋着地」注四「無主張、原作元主張、元爲无之誤」この注を讀んだだけで、張氏の寫本に對する訓練が全く缺如していることと、その理由まで推察できる。つまり「無」に改める無用の校改が、「无」との距離を作り、寫本でやはり殆んど區別の意識なく用いられる元・无二字の判讀を困難にしているのである。下の着も寫本は著に作っているのに、全く注意してない。18句「不免貧窮死」に「免、原作兌、據義文改」と注するのも全く不要なこと、寫本は唐代通行の俗體であるに過ぎない。唐代の用字に對する注意の缺如を示す例を擧げよう。(36) 8句「元來不怕死」注二「元同原」、この注は

現代の讀者に對する注としては誤っていない。しかし、すぐ次の詩(37) 7句「草舍原無牀」とあっさり改めてもらつては困るのである。少くとも唐代では現代語の「原」の義で「原」を用いることはないのである。勿論寫本は「元」に作る。字體についてのさらにひどい例は(40) 5句「膠漆發共喜」であろう。この詩は完全に校定が誤っているのだが、それはさておき「發」と校定された字は、寫本では「友」に點を打つた形である。この句正しくは「梵志與王生、蜜敷膠漆友」なのだが、張氏はどうやら簡體字の「發」と讀み誤つたようだ。

(11) 5句「正報到頭來、徒費將錢贖」注三、「原作上、出韻、據文義改」詩であるからには韻が非常に重要であることは言う迄もない。この例は原寫本にトとあるのを上と讀み誤つた單純な誤りである。「當然の報いが枕邊にやつてきて(病に臥せる破目になったら)、錢を出しお祈りしてもらつても無駄なこと」の意で韻も合い文義も通ずる。また12句「無心開衣幞」は「衣幞、原作衣眠、眠出韻、據文義改」と注するが、ひどい誤りである。入聲一屋一韻到

底の詩であるから、出韻と片付け、字を改める前に、この字體に類似した一屋韻の字を考えるべきであろう。寫本は勿論、服に作り誤っていない。詩の切れ目がはっきりしないことの多い王梵志詩では、韻は殊に重要である。韻の換りめ、出韻には常に留意せねばならない。張氏のこの點への配慮もまた甚だ心もとなく、多くの誤りの原因となっている。(30) 4句「從吾相便貸」この上の2句の韻字が得であるから、この貸の字には出韻でないことを示す注が必須であろう。『集韻』に「貸、音特、借也、本作貳」とある。次に(51)の韻字を順に挙げると、坐・箇・貨・和・過・倍となり、12句「得利過一倍」が失韻であるのに注意していないところが次の(52)の首句は殘缺として「兒、分毫壁眼爭」で始めている。實は殘缺しているのは(51)の第12句であり、12句とされているのは次の(52)の首句なのである。「利を得ること一倍を過ぐるに、分毫壁眼爭う」高い利益を貪りながら、なお眼をむいて利を争うという表現である。次に韻を無視したために詩の分合を誤つた最もひどい例を擧げる。(95)から(99)までの詩を、張氏

の校定により、續けて載せ、句に通し番號を附す。

- 1 無(无)常元不避
 - 2 果(業)到即須行
 - 3 従作(你)七尺影
 - 4 俱(但)墳一丈坑
 - 5 妻兒啼哭送
 - 6 鬼朴(子)唱歌迎
 - 7 古來皆有死
 - 8 何必得如生
 - 9 造化成爲我
 - 10 如人弄郭郎(禿)
 - 11 魂魄似繩子
 - 12 形骸若柳木
 - 13 掣取細腰肢
 - 14 抽牽動眉目
 - 15 繩子乍斷去
 - 16 即是乾柳模
 - 17 觀此身意相
 - 18 都由水火風
 - 19 有生皆有滅
 - 20 有始皆有終
 - 21 氣聚則(即)成(爲)我
 - 22 氣散即成空
 - 23 一群泊(怕)死漢
 - 24 何似叫(叩)頭蟲
- 韻に着目すれば、1、8、9、16、17、24と三つに區切る見當がつく。問題はこのうち10句郎と16句模という出韻である。ところが前者は、寫本は確かに郎に作るが、張氏注にも『通俗編』を引き「顏氏家訓云、俗名傀儡爲郭禿」とある如く、くぐつを郭郎ともいい郭禿とも言ったのであ

書評

り、ここは同義語を寫本が書き誤ったとして處理できる。

つまり郭郎「禿」と校定すればよい。16句は出韻として疑いを存しておくしか仕様がなないが、詩の意味からすればこゝで切れることは確定できよう。すなわち、第一首

「无常 元より避けず、業到らば即ち須らく行くべし。従え你 七尺の影なるも、但だ一丈の坑を墳とするのみ。

妻兒は啼哭して送り、鬼子は唱歌して迎う。古來皆死有り、何ぞ必ずしも生の如きを得ん。」

第二首

「造化の我を成爲こと、人の郭禿を弄する如し。魂魄は繩子に似て、形骸は柳木の若し。掣取すれば細腰、抽牽すれば眉目動く。繩子 乍ち斷し去れば、即ち是れ乾柳模。」

第三首

「此の身意の相を觀るに、都由水火風に由る。生ずる有れば皆滅する有り。始る有れば皆終る有り。氣聚れば即ち我と爲り、氣散すれば即ち空と成る。一群の死を怕るるの漢、叩頭蟲に何似ぞ。」

として整理されよう。なお無(无)の如く示した()内

は寫本の字であるが、ことごとく張氏は誤っている。張氏は(95) 1~6、(97) 7~10、(98) 11~14、(99) 15~18、(100) 19~24と合計五首に分つという誤りを犯している。詩をどこからどこまでで一首とするかは、詩の解釋にとつて決定的と言つてよい意味を持つと思われるが、その分合を誤るものが極めて多い。以下、その訂正すべきものを挙げておく。(37) / (38) ↓ 26句一首。(41) / (42) / (43) ↓ 32句一首。(48) 12句とするが誤り、8句まで。9句以後 ↓ (49)。(57) 首2句 ↓ (56)。(60) 1~4句で一首。5~12句一首。(92) / (93) ↓ 8句一首。(114) 下2句 ↓ (115) の首2句と合せ一首、(115) の下8句で一首。(119) の首2句 ↓ (118)。(133) 12句とするが、前6句一首、後6句一首。(139) 前4句一首、後8句一首。(151) 五言詩として5句に區切るは誤り、六言詩に改め(152) と合せ12句。(212) 4句一首とするが續かない。分けて殘詩一首とする。(249) 前4句 ↓ (248)。(249) 第5句以下と(250) 第10句までで一首。(250) 11~12句 ↓ (251)。(253) / (254) ↓ 16句一首。(256) 首2句 ↓ (255)。(267) 末2句 ↓ (268)。(282) / (283) ↓

20句一首。(286) 首2句 ↓ (285)。(291) 下2句 ↓ (292)。(14) 1句「百歳有一人、得七十者稀」この例は注では分りにくいので、寫本のまま掲げてみよう。甲一本「百歳乃有一人得七十者稀。」甲四本「百歳乃有一人得七十稀。」比べてみると甲一本が一字多くなつていて衍字が含まれてゐることが分る。張氏は「原作、百歳乃有一人、乃爲衍文、已刪」ときわめてあつさり乃を衍字にしていて、甲四本の異文には言及すらない。しかし、甲四本はこれできちんと句をなしており、これと比べれば、むしろ者が衍字である可能性もある。また傍證としては(17)「人人百歳乃有一、縱令長□七十稀」をも挙げ得よう。張氏の校定では「百歳一人有り、七十を得る者は稀」、甲四本では「百歳は乃ち一有り、人七十を得るは稀」となるわけだが、このどちらに従うべきかはともかく、甲四本は校訂に際し考慮すべき異文だとは言えよう。ここで張氏が甲四本の異文を注記しなかつたのは非常に大きな手落ちと言わねばならない。寫本の景照を見るすべのない讀者、とりわけ中國の讀者に検討のための共通の基盤を與えないことになるからである。

(11) 夫婦相對坐 張氏は以下14句までを一首、(12) 平生歌舞處以下12句を一首、(13) 富者辦棺木以下14句を一首とするのは誤り。合計36句、つまり(13)の10句「冥冥不省學」までで一首とし、(13)の下4句「擎頭鄉里行、事當送靴襖、有錢但着(著)用、莫作千年調」を一首とすべきである。

(16) 張氏の校録を掲げる。寫本が正しく張氏の誤るものは()に訂正しておく。

- 「1 福生至西方 2 各難(雖)知厭足
 - 3 身是有限身 4 程期太劇促
 - 5 縱有(得)百年活 6 徘徊如轉燭
 - 7 憨人連腦癡 8 買錦妻裝束
 - 9 無心造福田 10 有件事(使)奴僕
 - 11 只得暫時勞(榮) 12 曠身入苦海(毒)」
- 注一に「福生至西方、首句之前、還有殘詩句、『善勸諸貴等、□□□□□□、火急造橋樑、運度身得過。』韻不同」と言う。これは「善勸諸貴等」を初句とし、「福生至西方」を末句と考えれば整理できる。「1 諸貴等に善勸す、2 □

□□□□□、3 □□□□□□、4 火急に橋梁を造れ。5 運度し身過ぐるを得れば、福生じ西方に至らん。」次に寫本を見れば、甲四本には2の前に「造知賢貴等」の5字がある。

(張氏失校) 更に12句めの末字を甲一本は正しく毒に作っている。甲四本は毒↓兼↓海と誤ったのであろうか。2 足4 促6 燭8 束10 僕12 毒と入聲一屋韻で12句一首と整理し得る。すなわち「賢貴等に造知す、各おの厭足を知ると雖も、身は是れ有限の身、程期 太はだ劇促たり。縱え百年の活を得るも、徘徊すること轉燭の如し。憨人は連腦癡、錦を買いて妻裝束す。福田を造るの心無く、奴僕を使うに意有り。只だ暫時の榮を得るのみ、曠身 苦毒に入らん」となる。

(17) 傍看數箇大 張氏はこの詩の前6句を五言、後の2句を七言とするが誤り。以下(18)と合せて七言の一首である。先ず訂正した校録を掲げよう。

- 「1 傍看數箇大 2 舍擬作萬年期
- 3 人人百歲乃有一 4 縱令長□七十稀
- 5 □□□□□期劫半 6 欲似流星光燿時
- 7 中途少少遼亂死 8 亦有初生□於兒

- 9 無問男夫及女婦 10 不得驚忙審三思
 11 年年相積罪根重 12 月月增長肉身肥
 13 日日造罪不知足 14 恰似獨養神豬兒
 15 不能透圈四方走 16 還須圈待裏死時
 17 自造惡業還自受 18 如今苦痛還自知
 19 各各保愛膿血袋 20 一聚白骨帶頑皮
 21 學他造罪身自慢 22 羨□□福延黠兒
 23 今身不形不修□ 24 □□至寶山空手歸
 25 向前□□□□□ 26 □□□□□□隨
 27 倒曳□□□□□ 28 □□□□□□□□
- これを張氏の校定と比べてみよう。1 2 「傍看數箇大、
 憨癡造宅舍、擬作萬年期」五言と讀み誤つたのみならず、
 數箇大に「數個人的俗稱」と注する、全くの誤り。3 「人
 人歲有一」寫本にある百・乃の二字脱落。4 「縱令七十稀」
 長の字脱落。5 6 7 8、寫本に出てくる字の順番を全く無
 視。「少少撩亂死7、亦有初生8、期却半5、欲似流星光
 暫時6、中途少7□□□□□、□□□□□於兒」11 「年年相
 續□□重」罪根の二字脱落。續は積に改めるべきか。14

「恰似獨養神□□」猪兒の二字脱落。15 以下について「原
 本及甲四本以下俱殘佚」と注するが、なお七十一字を校定
 することができる。

さて卷一を通覽したわけだが、もうこれ以上検討を続け
 る必要はあるまい。寫本に於ける排列・寫本の空き間・寫本
 の書きぐせ・俗體字異體字等、字體の注意・時代による文字
 の使い分け・別字異文・佛教語彙・口語語彙・押韻。これらの
 點に對する注意の缺如が上に見たようなさざまな誤りを
 招來したのである。本書はこのように、寫本を扱う上での
 問題點を實例として明示してくれはしたが、研究の出發點
 たる校定本としては全く信頼を置くことができない。

書評の體を成さないことを承知の上で些細な事柄にばか
 りこだわつた理由は、今日なお中國における敦煌文學語學
 研究は、テキストを讀み込んで誤りを訂正するという方法
 を中心としているからである。徐震堉氏の「敦煌變文集校
 記補正」「敦煌變文集校記再補」(華東師範大學學報・人文科學
 一九五八年一期二期)はその方法で大きな成果を擧げたけれ

ども、校定本の單純なミスのために遠回りさせられることも決して少くないのである。校定には寫本を見る便宜のない人が信頼して利用できる精度が要求される。それに答えるのが寫本を見る便宜のある者の義務であらう。

最後に私事に涉るが、我々が入矢義高先生の主催される敦煌文獻の輪讀會で王梵志詩を読み始めたのは一九八〇年三月の事であった。四年の歳月を費して、ようやく、現在知られている敦煌本王梵志詩集の全部を読み終えたが、張氏の外に出るのは、氏が補遺として七首を録したレニングラード本の51首だけである。それも含めて、我々自身の校定本を提出することを課さねばならないようだ。本稿で論じた事柄は輪讀會での議論に負うものが極めて大きいことを記しておきたい。

(奈良女子大學 松尾良樹)

追記：本書に對しては潘重規「王梵志詩校輯讀後記」、『敦煌學』第九輯）および項楚「王梵志詩校輯匡補」、『中華文史論叢』一九八五年第一輯）の二書評が詳細な修訂を加えている。参照して頂きたい。

書 評

蕭 鳳 『蕭紅傳』

百花文藝出版社 一九八〇年十二月 一二九頁

ここ數年の「蕭紅熱」は大變なものだ。それも日本だけの現象ではない。今、單行本に限って國外で刊行されたものをあげてみよう。

一、作品集

- ①、『The Field of Life and Death and Tales of Holan River』Translated by Howard Goldblatt and Ellen Yeung, Indiana University Press. 臺灣版、敦煌書局股份有限公司、一九七九年八月。

- ②、『生死場』香港中流出版社有限公司、一九七九年十月。
- ③、『呼蘭河傳』黑龍江人民出版社、一九七九年十二月。
- ④、『跋涉』三郎・悄吟共著、黑龍江省文學藝術研究所、一九七九年（五畫印刷社、一九三三年十月復刻版、横田書店復刻）。
- ⑤、『生死場』黑龍江人民出版社、一九八〇年五月。
- ⑥、『蕭紅選集』（中國現代文選叢書）香港文學研究社、一九八